

3.19 K シリーズ VLBI システムの名前の由来

河野宣之

鹿島支所が中心になって開発した VLBI システムには K-○ という名前がつけられています。その由来は諸説あって、実のところははっきりしていません。公式の会議などで決められた名前ではなく、短くて便利であったため、誰からともなく使用されて、いつの間にか公式な名前になった、というのが真相でしょう。少し当時使用されていた名前について話しましょう。

1979 年度に「超高精度 VLBI システム」の開発がスタートしました。この装置は鹿島支所で開発する 3 世代目の VLBI システムです。既に述べたように、最初のシステムは「国内基礎実験に使用した VLBI システム」、2 番目は「位相シンチレーション測定システム」、と長い名前を使ってきていました。さすがに 3 番目の「超高精度 VLBI (超長基線電波干渉技術) システム」になると呼び名が長すぎて、まるで落語に出てくる「寿限無」のように、3 研のスタッフ自身もうんざりしていました。

NASA が中心になって開発してきた米国システムは 2 号機から Mark-II (マークツー)、3 号機は Mark-III (マークスリー) と呼ばれ、公式の文書にも使われていました。当時、日本の大メーカーの車にも改良型に Mark-II (マークツー) と名前がつけられていて、このような名前の付け方は簡易で短く、しかも改良型とわかりやすいものでした。そこで、日本のシステムもこのような名前をつけたらどうかという意見がそれとなく出て、これまでの長い名前にうんざりしていたスタッフは大いに賛成し、色んな案が出されました。記憶は確かでないのですが、RRL-○ (Radio Research Laboratories:電波研究所) とか Kashima-○ とか、本所のある地名小金井市の Koganei-○ が候補に挙がっていたと思います。いずれも長く、簡単に Kashima の K-○ という案が出されました。しかし、当時の 3 研のメンバーは 6 人中、川尻、河野、小池、川口の 4 名も K で始まっており、高橋富士信さんと吉野さんの二人が異なっていました。人の名前の頭文字を使うのは良くない、との意見もありました。あれやこれやの議論 (少なくとも公式の会議ではなかった) で Kashima の頭文字であり、本所と水素メーザ原子標準を開発する周波数標準部のある小金井市の頭文字でもある K を冠にした K-○ にしたらどうかという意見が支配的でした。その後、簡易でしかも 3 台の区別も明確であったため、みんなが使い始めました。そして 1979 年度の電波研年報に以下のような文章とともに公になりました。「VLBI システム研究開発推進本部：米国 Mark-III システムの調査を詳細に行い、これとの両立性及び将来の精度をも考慮した当所システムの構成案 (K-3 システムと呼ぶ) を作成した」。この年度の米国との会議の資料にも K-3 名が使用され、国際的にも K-○ という名前が使用されることになりました。